

アフリカ開発の現在

農家の経営——マラウイの事例から

原島 梓

アフリカの農家は、どのような農業を営み、またどのような問題に直面しているのだろうか。ここでは、マラウイの農家を事例として取り上げ、農家の経営および直面している問題について紹介したい。

アフリカの農家は、旱魃や洪水といった天候不順、肥料・労働等の投入要素市場の問題、インフラの未整備、情報不足等、様々な問題に直面している。こうしたなかでもマラウイでは、特に融資制度の未整備による資金不足が深刻な問題になっている。そこで以下では、具体的に、メイズ生産、タバコ生産、酪農の三点を取り上げ農家の経営を紹介し、そのなかで資金不足という問題についても言及する。

●マラウイの農業

マラウイは東南部アフリカに位置する大陸国である。同国の経済は農業に大きく依存しており、人口の八六％が農村に居住しているほどである。家計調査(参考文献①)によれば、農家の九六％が主食のメイズを生産しており、農家はその他に、落花生や野菜、パーレー種タバコ(以下、タバコ)

等の生産を行っている。

マラウイでは一九九四年に、主に農家に対し融資を行っていた政府系金融機関が破綻した。その後、新たに農家を対象とした金融機関が設立されたものの、融資の規模は大幅に縮小されている。金融機関から融資を受けられた農家の割合は、二〇〇一年、二〇〇四年ともに二％のみと、その割合は非常に低い。また、親戚や金貸し、NGO等といったインフォーマル金融から融資を受けた世帯も四％のみであり、大部分の農家はどこからも融資を受けられていない(参考文献②)。

●メイズ生産

近年、マラウイのメイズの総生産量は低迷している。その一因としては、依然としてメイズの在来種の採用率が高く、ハイブリッド種の採用率が低いため、単位面積あたりの収量が低迷していることが挙げられる。ハイブリッド種は在来種に比べ単収は高いものの、種子を毎年購入する必要がある。一方、在来種は単収は低いものの、種子は自家採取できるため、種子の購入費用

はかからない。

ハイブリッド種の採用率の低迷を憂慮した政府は、一九九八年から二〇〇四年にかけて、ハイブリッド種の種子と化学肥料を貧困農家に対し無料で配布する「スターターパック・プログラム」を実施した。これは政府が、「比較的貧しい農家の多くが在来種を採用しているのは、ハイブリッド種の単収の高さを知らないためであり、ハイブリッド種を一度使えば、その単収の高さを実感し、以後、農家自身がハイブリッド種を購入して使用するようになるであろう」と考えたためである。

しかし、このプログラムの終了後、ハイブリッド種の採用率に大幅な伸びは見られなかった。それは、多くの貧困世帯が、ハイブリッド種の単収の高さは理解したものの、所得水準に比べてハイブリッド種の生産に必要な投入財の価格が高く、購入できなかったためである。マラウイの農家の平均メイズ作付面積は一・六エーカーであり、この面積にハイブリッド種を作付けた場合、必要な投入財の購入コストは農家の平均年間総所得の三〇％程にも相当する。した



アフリカ開発の現在

がつて多くの世帯は資金を調達できないため、同プログラムの終了により無料の投入財をもらえなくなつてからは、ハイブリッド種の採用を諦め、やむを得ず在来種を採用している。

●タバコ生産

マラウイの農家にとって、タバコは最も収益性の高い作物である。タバコ生産で得られる一エーカーあたりの農業所得は、メイズ（ハイブリッド種）の七倍、落花生の八倍にもあたる。しかし、これほどまでに収益性が高いにもかかわらず、マラウイでタバコ生産を行っている農家は全国の一〇%程にすぎない。なぜ、多くの世帯はタバコを生産しないのだろうか。

その理由の一つに、農業経営費の高さがある。タバコ生産に要する一エーカーあたりの農業経営費は、メイズ（ハイブリッド種）の三倍、落花生の一八倍と非常に高く、農家の平均年間総所得の約五〇%にも相当する。したがって、この高額な農業経営費を賄える世帯しか、タバコを生産することができない。

マラウイでは金融機関から融資を受けられる世帯は非常に限られている。そのため大部分の世帯はこの農業経営費を、自己資金やインフォーマル金融で賄わなければならない。したがって多額の農業経営費を用意することができる一部の比較的豊かな農家しか、タバコ生産に参入することができ

ない。

●酪農

マラウイにおいて、酪農もまた収益性が高い。乳牛一頭の年間所得は、一エーカーのメイズ（ハイブリッド種）生産で得られる所得の三倍、落花生のその四倍にあたる。酪農は、タバコ生産ほど収益性は高くないものの、経営面積が十分でない農家にとっては魅力的であると言える。しかし、乳牛を飼育しているのは農家全体のわずか八%のみである。

酪農家の割合が低い要因として、生乳の出荷先の問題や、技術普及の問題等、様々な要因が挙げられるが、なかでも子牛の価格が大きな要因になっていると考えられる。子牛一頭の平均価格は、農家の年間総所得の一・四倍と、非常に高い。したがって子牛を購入できる世帯は、よほど裕福な農家か、あるいは融資を得られた農家に限られてしまう。しかし融資にはほとんど期待できないため、酪農家の割合は低迷している。

●資金不足の克服が課題

これらの例を見る限り、マラウイでは各農家の資金力が作物選択の際の重要な要素になっていると考えられる。収益性が高い作物は、農業経営費も高く、資金調達が必要となる。しかし同国では融資制度が未整備のため、大部分の農家は融資を得られず、

資金調達手段を失い、収益性が高い作物の生産に参入できていない。

比較的豊かな世帯は、資金力を活かし、収益性の高い作物を生産し、さらに農業所得を向上させている。一方で、比較的貧しい世帯は資金を調達できないため、農業経営費が低く収益性の低い作物しか生産することができない。そのため、比較的豊かな世帯と比較的貧しい世帯の所得格差は広がってきている。

近年、こうした状況を改善させるために、マイクロファイナンスに積極的に取り組んでいるNGOもある。しかし、二〇〇四年の段階でNGOから融資を受けた世帯は全体の一%に過ぎず、資金不足という問題の根本的な解決には至っていない。

（はらしま あずさ／丸紅株式会社市場業務部）

《参考文献》

- ① National Statistical Office of Malawi and World Bank, *Integrated Household Survey 2004/05 (CDR)*.
- ② 原島梓「マラウイの農村金融—家計調査の分析から明らかになったこと」『アフリカレポート』第四七号、アジア経済研究所、二〇〇八年。